
ファイアーエムブレム ～星と魂の慟哭～

D. ナイト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファイアーエムブレム ～星と魂の慟哭～

【Nコード】

N9087T

【作者名】

D・ナイト

【あらすじ】

科学と魔法が人々を支配する大陸、バーレニア。

ある日東の大国ヴェルシナ王国が、大陸統一を目指すべく、西の大国アードレイン共和国に対し、宣戦布告をする。アードレイン共和国は当初これを不服としたが、ヴェルシナ王国は突如、共和国の国境付近の街を奇襲するという暴挙に出た。

アードレイン共和国はこれを機に、ヴェルシナ王国の宣戦布告を受

諾、ここに、戦争が始まる。

だが、ほとんどの人は知らなかった。この戦いの裏に渦巻く、大いなる陰謀に。

ある夜明け前（前書き）

ファイアーエムブレム作品とはほとんどつながりはない、オリジナルストーリーです。

近代型の戦記にFEの要素を混ぜてみたらどうなるか、と思い、この小説を書き始めました。

駄作になる可能性もありますが、どうぞよろしくお願いします。

ある夜明け前

夜明け前の無人の駅に、蒸気機関車が、猛烈な煙を上げて走っていく。

先頭車両はもちろん、客車や貨物車と思われる車両も全てが、不気味と黒い機関車だ。

シュツシュツシュ・・・

どの車両にも、窓の類は全く見当たらない。ただ、黒い壁で覆われている。どこまでも、黒い車両が続く。

機関車は、速度を落とす気配も、汽笛を鳴らす様子もない。どうやら、この駅に停まるつもりはないようだ。

猛烈な速度で、駅のホームを通過する。

まるで、急いでいるようだ。何か、人に見つかってはマズいことでもするかのようだ。

やがて、いくつも連なった高層ビルを逆光に、東の空が明るくなりだす。新たな一日が、始まるうとしている。

そして、その夜明けとともに・・・何が、動き始める・・・。

ある夜明け前（後書き）

主人公の登場シーンは、また次回に！

序章 く工作員く（前書き）

科学と魔法が人々を支配する大陸、バーレニア。

この大陸は、東のヴェルシナ王国、西のアードレイン共和国の二大
国が、大地を大きく分けていた。

東のヴェルシナ王国は、常に時代の先をいく国である。
石炭や鉄といった地下資源に恵まれ、産業革命を真っ先に起こした。
それに伴い、国民の生活はより豊かになり、国力の強化も進んだ。

バーレニア暦2047年4月。

このヴェルシナ王国の国王アルデインは、突如西の大国アードレイ
ン共和国に対して宣戦を布告。一方、アードレイン共和国議会は、
これを認めなかった。

だが、ヴェルシナ王国はその決定に、簡単に従うつもりはなかった。

序章 ー 工員 ー

ー ヴェルシナ王国領、シルル県西部 ー

朝焼けの草原を、黒い機関車が疾走していく。ちょうど、朝焼けに背を向ける形で、煙を上げながら。

つまり、西へ向かっているのだ。

機関車のある一つの車両には、数人の男たちが座席に座っていた。窓がなく、中は真つ暗だが、ろうそくを立てて何とか灯りを保っている。

「みんな・・・今回の作戦について、もう一度打ち合わせをしたい」
金髪の中年男が、他の者の顔を見比べる。

すると、他の男たちも彼の方を見る。

「隊長、確か・・・所定地爆破作戦ですよね？」

緑の髪の少年がそう聞くと、隊長と言われた男は、うなづく。

「ああ、その通り。我々はこれから、国境を越えてすぐにある、ゼツツ市に潜入し、所定爆撃ポイントに爆弾をセット、爆破する」

この汽車に乗っている4人の男たちの正体は、ヴェルシナ王国軍の特殊工作員である。これから秘密裏にアードレイン共和国に侵入し、破壊工作を行うのだ。

金髪の中年が、この隊のリーダーである。

彼の名はベクロス。数々の戦果を上げてきた、歴戦の工作員である。

「まず、国境手前でこの機関車を乗り捨てる。そこから、各自必要なものを手に山間部より、共和国へ侵入を果たす」

そこまで言うてから、紫の髪の少年が拳手する。

「ベクロス隊長。共和国との国境付近では敵の警戒も強いと思われ
ますが・・・大丈夫なのでしょうが？」

「心配はない。この道には敵の警戒はないとの報告を、先日の偵察
部隊より受け取っている」

「そうですね・・・」

部下の質問に答えてから、ベクロスは再び話し始めた。

「話を戻そう。国境を越えてすぐにあるのが、ゼッツ市の市街地だ。
この街に、日暮れとともに潜入する。そして、所定爆撃ポイントに
爆弾を設置し、起爆。その後は速やかに撤退するのだ」

そして、ベクロスは紫髪の少年に目を向ける。

「ブレイシアよ。今回は、お前の初任務だ。我々が向かおうとしている先は戦場・・・敵にやられることは、すなわち死を意味する。訓練とは違うということを、頭に叩き込んでおけ」

「はっ、肝に銘じます」

ブレイシアと呼ばれた少年は、胸に手を当てて返事をする。

なお、この少年こそが、この物語の主人公である。

ベクロスはそれを見てうなずいてから、残りの二人にも目を向ける。

「マリオン、ダルク。お前たちも、戦場での経験は浅い。十分、注意するんだぞ」

「かしこまりました」

緑髪の気の弱そうな少年マリオンは、緊張した様子で、

「はいっ!」

赤い髪につり目の少年ダルクは、元気に返事をする。

「うむ。・・・では、時間からしてそろそろ、国境付近に到着のはずだ。各自、下車の準備をせよ!」

ベクロスの指示に従い、各自は準備に取り掛かった。

共同部屋に戻った3人の少年兵は、下車準備を進めていた。

「ねえブレイシア……僕たち……生きて帰れるかな……？」

緑髪の気の弱い少年、マリオンが、ブレイシアにそう聞く。

「僕……本当は戦いたくないのに……」

ブレイシアは、少し考えてから答える。

「そうだな……これから、戦場に行くんだ。死ぬ可能性も、十分あるだろうな」

「そ、そうだよね……」

それを聞いていた赤い髪につり目のダルクが、声を上げる。

「おいおい、お前ら……なに弱気になってんだよ！ おれは、絶対生きて帰ってやるさ！ 向かってくる共和国の連中なんか、全員倒してやる！」

「でも……今回の任務は爆破だよ？ 戦いは、避けるべきじゃあ……」

マリオンに指摘されて、ダルクは言葉に詰まる。

「ま、まあそうだけどよ……けどさ、おれは張り切って戦いたんだよ。前の任務の時は、途中で失敗しちゃった。だからこそ、がんばりてえんだ！」

そこで、ブレイシアが2人を呼ぶ。

「2人とも・・・準備は出来たのか？ 置いてくからな」

そして、さつさと荷物を背負い、部屋の外へ行ってしまった。

「え・・・わ、待ってブレイシア！」

大急ぎでマリオンは装備を整え、ブレイシアの後を追う。

「・・・っておいこら！ 新入りが先輩を置いてくんじゃねえよ！」

ダルクも、あわてて装備をして追いかけた。

〈ヴェルシナニアードレイン国境〉

「よし、全員いるな。では、これから我々は国境を越え、ゼッツ市を目指す。離れぬよう、ついてこい。遅れたものは、問答無用で置いて行く」

機関車から降りた一行は、国境の峠を目指し、行軍する。

平野部では警備が厳しいため、峠越えでの国境突破をしようということである。

「ブレイシアよ」

峠を登る中、唐突にベクロスは、ブレイシアに話しかける。

「はい、何でしょう?」

「緊張しているのか?」

そう言われて初めて気が付いた。

「はい・・・しているかもしれません」

「するなといつても、無理もないか・・・今のうちに、周りの景色でも見ておくがいい。戦いになったら、そんな余裕も無かるう」

しかし、ブレイシアはそんなことする気分にもなれない。

(景色を見る余裕なんて、俺にはない。これから、戦場に行くんだぞ? 隊長は、平気なのだろうか?)

だが、その思いは口に出すことはなかった。

春の野山、である。野鳥のさえずりや、新緑の葉、色とりどりの花が美しく、心を和ませる景色。ブレイシアはそれらに目もくれず、集中をしていた。

あまり自分からはしゃべりたがらない上、根暗な性格なのだ。

(どうしてみんな、必要のないことをするんだ? 戦いに行くのだから、そんなの見ても仕方ないだろう・・・それよりも、任務のことを考えるべきだと思う)

そうこうしているうちに、視界が開けた。

「みんな、気をつける・・・何者かが、我々を狙っているようだ・・・」

峠の中腹の開けた場所に出た時、ベクロスは3人の隊員に待ったをかけ、注意を呼び掛ける。

「て、敵の・・・伏兵でしょうか・・・？」

マリオンが心配そうに、周囲を見渡す。

「共和国の連中め・・・このおれが、ハチの巣にしてやるぜ」

ダルクは反対に、やる気のような。しかし、ベクロスは落ち着いて言う。

「待て・・・この辺りには、共和国兵はいないはずだ。おそらく、野党どもだろう」

「野党・・・ということとは、山賊とかの類ですか？」

マリオンの質問に、ベクロスは首を縦に振る。

「ああ。この辺に共和国兵がない理由は、山賊どもが巢食っているためだ」

やがて、そこらへんの物陰から次々と、山賊たちが姿を現してきた。皆、剣や斧で武装しているが、銃の類のものを持った者は、少ないようだ。

ベクロスは、背中に背負ったを鋼の長銃を取り出し、命令を下す。

「全員、武器を構えよ。この一団を駆逐する。警戒を怠らず、全員討伐するのだ！」

それに応じ、ダルクは鉄の長銃、マリオンは鉄の狙撃銃、ブレイシアは鉄の拳銃を構える。

そして、大勢の山賊たちに、応戦を開始する。

「山賊ども、かかってきやがれ！」

ズダダダダ！！

ダルクは、長銃で次々、山賊を撃つていく。だが、長銃というものはあまり強力な殺傷力というものはないのだ。接近戦では、剣など古来からの武器の方が、はるかに強力である。

やはり、多くの山賊たちは、倒れずにこちらに向かってくる。

「くそつ、倒し切れない……」

生き残っていた山賊は、ダルクに剣を突き立てる。こうなってしまうと、銃使いはお手上げだ。

「へへっ、悪いが死んでもらうぜえ！」

「うぐ……！」

「死ねやー！！」

剣を振り降ろそうとした、その時。

ダーーーン！！

「があ……ふ……」

ダルクを攻撃していた山賊は、突然頭から血を流して倒れる。

「……よかった、間に合って……」

撃ち抜いたのは、マリオンである。マリオンはスナイパーであるため、この狙撃銃が使えるのだ。

「悪かったなマリオン、助かったよ」

「いえいえ、お互い様だよ」

2人は、別の山賊たちに向かい合った。

前の方では、ベクロスが一人で大勢の敵と戦っていた。

「私はヴェルシナ王国の軍人だ。山賊などに、後れは取らない」

ズダダダダ！！

見事な銃さばきで、ベクロスは次々と山賊たちを倒していく。と、その時だった。

ダーン！

「！」

突然銃声が響いたと思った時、ベクロスは腕から出血をした。

「敵にも、銃の使い手がいるのか・・・」

瞬時に状況を見て、銃の使い手を見つけ、逆に射撃をする。

ダダーン！

「ぐわっ・・・見つかった・・・」

敵は、倒れた。

ブレイシアは敵をかく乱しつつ、拳銃で敵を撃つ。

だが、拳銃は長銃以上に、威力で劣る武器である。それゆえ、有効な攻撃手段とは言えない。

(この場合は・・・剣を使うべきだな)

速やかに判断し、拳銃を右腰にしまう。そして左腰から、鉄の剣を取り出す。

「・・・そこだ」

シャキーン！

「ぎゃあ・・・」

拳銃によってダメージを受けていた山賊は、剣による斬撃によって倒されていった。

しばらくして、戦いは片付いた。

「みんな、ご苦労だった。無事山賊は、全員討伐完了だ」

各自で怪我の治療をし、少し休憩してから、峠越えの続きを始める。

「今回の戦いは、敵が銃をあまり使わなかったため、比較的楽だっただろう。だが、本当の戦場は全く違う。気を付けるように」

ベクロスは、そう3人に忠告する。今回こそ銃の使い手は少なかったが、戦場では銃・・・そして、魔法が、中心となるのだ。

やがて、峠を下り・・・前方にゼツツ市街が見えてきたころには、
空は夕暮れとなっていた。

序章 く 作業員く (後書き)

なんか・・・ぐだぐだですみません；；

難しい><；

1章 く爆破任務く（前書き）

ヴェルシナ王国の4人の工作員は無事、アードレイン共和国のデンバル州の都市、ゼッツ市への潜入を果たした。

4人の目的はただ一つ。このゼッツ市の変電所の、爆破である。

アードレイン共和国との開戦を狙う上では、決して失敗できない任務である。

新人工作員であるブレイシアは緊張しつつも、任務を成功させるべく、進撃準備を進めるのであった。

1章 爆破任務

共和国領、デンバル州ゼッツ市

日が傾き、辺りが夕闇に閉ざされていく中、4人の作業員はゼッツ市に到着した。

隊長であるベクロスは、全員に言い渡す。

「この街は我が国、ヴェルシナ王国との国境に近いため、街全体の警備も厳しいだろう。よって、正面からはとても突入は無理だ」

見ると確かに、街の入り口は兵士たちがアードレイン兵たちが守っている。このままでは確実に、侵入は出来ない。

「では隊長、どうするんですか？」

「それを今から、伝えるのだ」

ダルクの質問に、ベクロスは街の見取り図を広げる。

「この辺りが、今我々がいる場所。そして……この、街の北西部にあるのが、ゼッツ変電所だ」

ベクロスは、指で見取り図を指す。

「変電所の裏手に、大きな空きビルがあるだろうか？ 我々は街を囲

う城壁から、この空きビルに潜入する。その後、空きビルから変電所へ、ワイヤーで乗り移る……」

「なるほど……そこからが、破壊工作開始ですね？」

「ああ、そういうことだ」

マリオンも、納得したようだ。

ベクロスは、一言も口を聞いていないブレイシアの方を向く。

「ブレイシア。今の説明で、分かったか？」

「はい、問題ありません」

ブレイシアは、小さめの声でそう答えた。ベクロスは、見取り図をしまう。

「よし、では全員、私についてこい。これからこの城壁を登り、北西の空きビルを目指す」

人目に付かない所から、4人はワイヤーをかけて城壁をよじ登る。

一般人にはとてもできない芸当だが、特殊作業員である4人は、厳しい訓練を積んでいる。ゆえに、こんなことなど造作もないのだ。

「よし、全員登ったな？ では、これから空きビルを目指す。いい

か、たとえこんな場所でも、敵や第三者に見つかる可能性はある。最大限の注意を持って、行動するように」

城壁から見下ろすゼッツの街並みは、とても明るい。もう辺りは夜のとぼりだというのに、まるで昼間のようだ。

「ちえつ、共和国の連中、結構いい生活してんじゃん。まあ、おれらヴェルシナ王国国民は、もっと高い文明度だな」

ダルクが、おもしろくなさそうにそうつぶやく。それに対しマリオンが反応する。

「まあまあ・・・聞いたところだと、このゼッツ市は変電所があるから、夜もこんなに明るいんだって。変電所がこの街の人々の生活を、支えてるからだろうね」

ダルクはますます、不快そうだ。

「なあマリオン・・・おれたちはこれから、その変電所を潰しにくいんだぜ？　そういう発言は、やめた方がいいとおもうけどな・・・」

「あ、ごめん・・・」

と、その時。

一言もしゃべっていなかった2人の前を歩くブレイシアは、突然振り返る。

「お前らな、任務中だろう？　敵に見つかるから、おしゃべりはよ

してくれよ。迷惑だ」

そして、再び前を向いて歩きだす。

マリオンとダルクは、何となくばつが悪そうな様子だった。

「・・・よし、この辺でいいだろう。全員、止まれ」

先頭に行くベクロスは、空きビルの横で立ち止まる。

「ここから、あの空きビルに飛び移る」

城壁の高さは、空きビルよりも低い。これなら、飛び移ることは可能だ。

まず、ベクロスが真っ先に走り出す。助走を付けて虚空へ飛び出し、そのまま空中で体制を整える。着地は前転をし、衝撃を逃した。

美しい着地だった。長年、厳しい任務をこなした者ならではだろう。

「へへっ、まずはおれがいくぜ！」

ダルクが、二番手に飛び出す。特に問題なく、着地できた。

「じゃ、じゃあ次は僕が・・・！ えいっ！」

マリオンはほんの少し尻もちをついたが、怪我はなかった。

最後に残ったブレイシアに、ベクロスは手招きする。

(行くか・・・)

ふと足元を見ると、目がくらむ高さだ。こんな場所から落ちたら、命はないだろう。

(ダメだ、余計なことは考えるんじゃない)

そう自分に言い聞かせ、飛び出す。体から魂が抜けるような、奇妙な感覚が気持ち悪い。

とにかく空中で体制を整え、着地へと向かう。

無事4人は、空きビルの屋上に立っていた。

「全員無事だな？ では、今度はここから向かいの変電所の、4階の窓へ飛び移るぞ」

敵を警戒しつつ空きビルの5階へ降り、窓から向かいをのぞく。そこにゼッツ変電所があった。

ここから、変電所の4階の窓を破り、突入するのだ。

ベクロスはクロー付きのワイヤーを使い、4階の窓のすぐ上の壁にクローを食い込ませた。

軽く引つ張つて安全を確かめ、ワイヤーのこちら側の端を空きビルの階段の手すりに縛り付ける。

「では、全員滑車を腕に付ける。一気に、向こうへ渡るぞ」

そう言うや、ベクロスは滑車を付けた腕をワイヤーにセットし、空中へ身を躍らせた。

滑車が回る音とともに、ベクロスの体は変電所の建物へ滑るように移動する。そして。

ガッシャーン!!

ガラスが割れ、見事にベクロスは侵入したのだ。

彼に続き、3人は次々とワイヤーと滑車で、変電所へ侵入していった。

「な、何だ今の音は!?!」

「こっちの方から聞こえてきたぞ!」

「敵襲! 敵襲!」

変電所の中にいた警備兵たちは、大慌である。直ちに警報が鳴り響く。

ウウイーーーーン……

『シンニユウシヤ、ハツケン……4カイカラミカクニンノIEDガケンチサレタ……タダチニハイジヨセヨ……』

一般の社員が避難すると同時に、銃や剣、斧で武装したアードレイン兵たちが、割れたガラス場所に駆け付ける。

彼らの前に置かれていたのは、ドラム缶。アードレイン兵は当然、それらを疑った。

「さあ、侵入者どもめ……観念しろよ？」

拳銃を構えた偵察兵はそう言いつつ、ドラム缶に近付く。

「お前たちがこの中に隠れてるってのは、すでにお見通しなんだよ。さあ、とつとと出てきな！」

ドラム缶からは、反応はない。

「ちっ、だったら……こっちから正体を出させるだけだ！」

偵察兵はそう言って、ドラム缶をどかした……すると……！

ピッピッピッピッピ・・・カチツカチツ・・・

「何・・・だとお・・・！？」

ドラム缶の中には誰もいなかった。代わりに、何かの装置があった。

液体が入ったビンに、赤と青の導線、さらには赤いデジタル表示のカウンタダウン。

カウンタダウンはもう、残り5秒を切っていた。

爆弾である。

「し、しまった！ みんな、逃げろっ！！」

集まってきていた大勢のアドレイン兵たちに、偵察の男はそう叫ぶ。

だが、もう遅かった。

カウンタは0秒を指し・・・。

ドッカアアアーン!!!

その場に集まっていた兵士全員を、爆風が飲み込んだのだった。

一方作業員の4人は、すでに地下に潜入していた。

上の方で爆音が響いたのを聞いて、ダルクが歓声を上げる。

「よっしゃあ！ 共和国の兵士たちめ、見事に隊長の仕掛けた爆弾に引っ掛かったみたいですね！」

「ああ、そのようだな」

そう、これはベクロスの策だったのだ。防御システムや電気系統の裏を突き、兵士たちを4階に集めるための。

「だが、油断はするな。おそらくこの地下にも、兵士は残っている。……再度確認するが、我々はこの先にある変電機に、爆弾を仕掛ける。仕掛けたら、爆発する前にすぐにここから脱出するんだ！」

爆弾設置は、ブレイシアが行うこととなった。ベクロスから爆弾を

預かり、彼らが敵を足止めしているうちに、ブレイシアが爆弾をセツトする、という作戦だ。

(この爆弾で、この変電所は完全に機能を失う。そうなれば、この街は死んだも同然だ。開戦したら、我が国がゼツツ市を攻め落とすのが、非常に楽になる・・・)

ブレイシアは、国がどういふ思惑で工作員を派遣したかという推測を、おおかた付けていた。

曲がり角で、ブレイシアは拳銃を両手に、敵を警戒する。

(・・・よし、誰もいないみたいだな)

すぐに、拳銃をしまう。代わりに剣を取り出した。

剣で戦うことの方が、好きだからだ。

「お、侵入者発見！ 逃がさないぞ!!」

一人の偵察兵が、ブレイシアを発見し、拳銃でこちらを撃ってくる。慌ててブレイシアは、近くの壁に身を隠した。

いくつもの弾道が、目の前を飛ぶ。

敵が弾をリロードしているうちに飛び出し、剣を突き立てる。

「撃たせない」

ザシュ！

「うつつ……やられた……」

偵察兵は、倒れた。

その様子を離れた場所から見ている者がいた。

「くそっ、味方がやられた！ 至急援護を頼む！」

長銃を装備した、ソルジャーである。無線でそう味方に伝え、自分も銃をブレイシアに向ける。

「仇だっ……！」

が、その鉄の長銃からは、弾は発射されなかった。

ダーン！！

「ぐはあっ……」

頭を、撃ち抜かれたからだ。

「させないよ、ブレイシアには」

マリオンが、狙撃銃で撃ち抜いたのだ。

「くらえーっ!!」

ズダダダダ!!

ダルクは、敵スナイパーを長銃で撃つ。だが、その後ろから大勢のソルジャーたちがやってきた。

「うわ・・・すごい数だ！ さすがにまずいかも・・・」

一斉に射撃体勢をとるソルジャー。弾に何発か当たりつつも、ダルクは物陰に隠れる。

その時だ。彼の後ろから、ベクロスが応援に来た。

「ダルク、無理はするな。私が援護しよう」

「あ、はい！ 助かりました！」

2人で敵の側面に回り込み、挟み撃ちをする。何とか、敵を倒すことに成功したのだった。

「隊長、ありがとうございました！」

「何、困ったときは呼んでくれ。それよりも・・・戦いはまだ終わ

っていない。気をつける」

ブレイシアは、変電機の前に立つ一人の男と向かい合っていた。

「くっ……貴様ら一体何者なのだ!? この変電所に、一体何の用だ!」

長銃を構え、カーキ色の軍服を着た男に対し、ブレイシアは冷たく言い放つ。

「俺に答える義務はない……それに、あんたが知る必要もない。俺たちの目的は、その変電機の破壊、ただそれだけだ」

「な、なんだとっ!? そんなこと……させてたまるか! ゼッツ市長殿から管理を任されているこのイヴァンが、それを食い止めて見せる!」

イヴァンというらしい男はそう言うと、鋼の長銃の引き金を引く。弾が、ブレイシアを襲う。

(くっ……だが、接近戦ではこっちが圧倒的に有利だ!)

弾を何発か受けながらも、拳銃でイヴァンを撃ちながら、一気に接近を図る。

「くっ……近付かれては何もできない……!」

「もう遅い」

武器を剣に持ちかえ、ブレイシアは2度剣を振る。血しぶきが、舞い飛ぶ。

ザシュツ！ スパアン！

「うぐぐ…無念…ぐふっ」

イヴァンは、倒れた。

(ここに爆弾をセットだな)

倒れたイヴァンから鋼の長銃を取り上げ、ブレイシアは爆弾を変電機にセットする。

カウントダウンが残り5分で、スタートした。

(逃げるぞ…)

「ハアツハアツ…」

後方から追ってくるアードレイン兵から、4人は逃げる。もう、目的は達成したのだ。市民に見つかるうと、問題はない。

出口脇のドアを動かすパネルに、ベクロスは取り付く。そして、パ

ネルを操作。

すると、目の前のドアが閉まり始めた。

「飛び出せえっ！！」

作業員たちは、ドアが閉まるギリギリのタイミングで逃げ出した。彼らの後ろで、追いつかなかったアードレイン兵たちが足止めを食らう。

その直後・・・

ドドドツカアアアーン！！！！

盛大な爆発音とともに、変電所は爆発、炎上した。

ゼッツ市の夜空を、赤い炎が染める。すごい光景だ。

そして、その次の日の夜明け・・・4人を乗せた蒸気機関車は、ヴェルシナ王国の王都への帰路を急いだ。

1章 く爆破任務く (後書き)

うん・・・やっぱり難しいな>><

当然だけど、FEらしくないな(汗)

2章 く開戦の影でく 前編(前書き)

ゼッツ市の変電所の爆弾テロ事件の犯人は、ヴェルシナ軍の仕業だ
ということが判明した。

アードレイン共和国政府は、これを機に正式にヴェルシナ軍と戦う
ことを決定。ここに、戦争が始まった。

ブレイシア達ヴェルシナ軍特殊工作員は、実はわざと証拠を残して
おいたのだ。共和国の参戦を誘うためである。

開戦の影で、彼らは別の任務に当たることになる。

2章 く開戦の影でく 前編

くアードレイン共和国領 デンバル州北部く

ベクロス達作業員は、任務のために国境を超え、共和国内のデンバル州の北部の、植林地帯にやってきていた。

「よし、隊員は全員そろっているな？ これより、今回の任務の細かな内容について、もう一度確認をとる」

ベクロスは辺りを見渡し、3人の隊員の顔を見る。

「今回の任務は、我々ヴェルシナ王国軍の装甲車両の護衛である。装甲車両は、この先に建設予定の電波塔の、建設機材を積んでいる。無事に電波塔が建設できれば、我が軍の行軍がより有利になるだろう」

4人の前には、ヴェルシナ王国の国旗が描かれた装甲車がある。乗組員である建設作業兵は、ヘルメットをかぶって進撃の合図を待っていた。

「もしかしたら、我々の位置はすでに敵にバレているかもしれん。その際は、我々が装甲車を守りきることとなる。よいな？」

ベクロスの話の終わりとともに、装甲車の乗組員が口を開く。

「では、ベクロス殿。我が装甲車の護衛、頼みましたぞ」

そして、装甲車に乗り込んでいった。

「よっしゃ！ 共和国兵め、どこからでもかかってきやがれ！」

張り切っているのは、やはりダルクである。長銃を構え、周囲に向けて振り回す。

「ダルク・・・そんなに大声出すと共和国兵が来ちゃうよ・・・」
マリオンはやはり、気弱な発言をする。

「大丈夫だよ！ 敵が来たら、このおれが一網打尽にしてやるぜ！」

「うん・・・大丈夫かな・・・？」

4人は、低速で走行する装甲車の周囲に張り付き、辺りを哨戒していた。

敵は、いつ何時現れるか分からない。見えないところから、ランチヤーが飛んでくるかもしれないのだ。

装甲車の煙突からは、石炭の煙がもつもつと出ている。これでは、発見されるのも時間の問題である。

（作戦開始時刻から30分・・・今のところ、何も変わった様子はないな）

ブレイシアは神経を研ぎ澄ませ、周囲の警戒をする。常に鉄の拳銃を両手に、戦車の後ろ側を守る。

（電波塔の建設に成功したら、通信環境が良好になる。王国軍の、大侵略が可能になる。そしたら・・・）

そこまで考えて、ブレイシアは考えるのをやめた。今は、余計なことを考える時間ではない。

しかし・・・。

「共和国軍の臆病者め！ さっさと姿を出せよ！ 怖がって逃げちまったのか？」

ダルクは、相変わらず騒いでいる。何度かベクロスが注意しているようだが、しばらくするとこの調子だ。

我慢していたブレイシアだが・・・。

「・・・おい、ダルク」

つい、呼んでしまった。

「お？ ブレイシア、どうしたんだ？」

「・・・さっきからうるさい。少しは黙れよ・・・」

言葉はごく普通なのだが、その言いようのない威圧感に、ダルクは少し怖くなる。

「わ、分かったよ。気を付けるよ・・・」

「・・・」

しびしび銃をしまうダルクを、ブレイシアは氷のような冷たい横目で見る。そして、再び持ち場に戻った。

装甲車の前で哨戒任務を行うベクロスが、声を上げた。

「む・・・！ 敵発見！ 総員、迎撃に当たれ！！」

その叫びとともに、3人の隊員は一斉に装甲車の前に出る。装甲車はもちろん、動きを止めて機関銃座から無数の弾を撃ち出す。

「ズイーヴェル隊長！ 先頭部隊が、敵との遭遇をしたようです！」

林の奥の方では、共和国軍の偵察部隊の隊長が、報告を聞いていたところだった。

「ふむ、そうか。怪しげな煙が上がってるという報告を聞いていたが、やはり・・・」

ズイーヴェルと呼ばれた隊長格の男は、狙撃銃を手にとる。

「それで・・・敵はどの程度の戦力なのだ？」

「それが、4人の歩兵と装甲車が1台との報告を受けております」

「何だと・・・そんな少人数なのか。ならば、我々の相手ではないな・・・早速、潰せ」

「はっ！」

ズイーヴェルの命令に従い、偵察部隊は一斉に進撃を始める。

「全員、警戒を厳にしてくれ。絶対に装甲車を破壊されるな！では、戦闘開始だ！」

ベクロスはそう告げてから、近くにいたソルジャーに向かっていく。共和国軍のソルジャーは、とっさに長銃の銃口をこちらに向ける。

「どうやら、あなたが隊長のようだな？ 悪いが、ここで死んでもらうー！」

そして、長銃が火を吹く。大量の銃弾が、ベクロスを襲う。

「くっ・・・あいにくだが、そう簡単に死ぬわけにはいかなくてね」
ダダダダダ！

反対に、鋼の長銃による強烈な反撃を与える。敵のソルジャーは、ひとたまりもない。

「みんな、気をつける……こいつら、強すぎる……」
そのまま、地面に倒れた。

マリオンは狙撃銃のスコープをのぞき、敵を探す。射程外から敵に気付かれる前に撃つのが、スナイパーというものだ。

「……！ いたっ！！」

ダーン！！

敵を瞬時に見つけ、引き金を引く。だが、無情にも弾は命中しなかった。

「！ 敵だ、かかれ！！」

発射音のせいで、マリオンは敵に見つかってしまう。数人の敵が、こちらに襲いかかってきた。

「うわわ……どうしよう……」

遠距離で圧倒的な力を誇るスナイパーだが、接近されてしまうと何もできない。

「へへっ、接近戦はこなせないんだろ？ おいみんな、やっちなえ
！」

近付いてきた敵ソルジャーや偵察兵は、一斉に長銃や拳銃を構える。

マリオンは、思わず目をつぶった。その時だ。

「させねええっ!!」

ダルクが、大声を上げてこちらに飛んできた。やってきたやいなや、すぐに長銃を構えて敵に向けて射撃する。

ズダダダダ!!

「ぐはっ・・・おのれ!!」

それでも立っていた敵たちは、今度はダルクを倒そうと向き直る。その時だ。

ダーン!!

敵の一人が、突然倒れたのだ。撃ったのは、マリオンである。

「当たった、よかった・・・」

「マリオン、助かったぜ!・・・さあ、今度はこっちの番だぜ!」

ダルクとマリオンは、敵に向かって射撃を始めた。

ブレイシアはただ一人、装甲車の左サイドで、散発的に襲いかかる敵と戦っていた。

装甲車の機関銃座からときおり弾が発射されるが、こちらはリ口

ードにかなり時間がかかってしまうのだ。

こちら側はすぐそばまで林が迫っていたため、敵も拳銃や剣、斧といった、接近戦を得意とする武器の敵が多い。それも考えたうえで、ブレイシアはこちら側を守っているのだ。

「たったひとりで何ができると言うのだ！ 戦いで重要なのは、数なのだ！！」

5人ほどの敵が、剣や斧で武装してこちらに迫ってくる。ブレイシアは拳銃を両手に構え、向き合った。

（何が、数が重要だ……。個々の能力が高くないとは、何の意味もないだろう）

頭の中でそう考えながら、拳銃で的確に敵を撃つ。何とか接近される前に、2人ほど倒すことができた。

「よくも仲間をやってくれたな……。地獄に送ってやるわ！」

斧を構えた敵の戦士は、そう吠えてこちらに突っ込んできた。ブレイシアはすぐに拳銃をしまい、剣を腰から抜く。

「……。ここは、戦場だ……。人が死ぬのは、当然だと思うが？」

「くそつ……。何を！！」

ブレイシアの言葉に逆上した戦士は、怒りに震えて斧を振り降ろす。だが、全く当たらない。

「・・・甘い」

「!?!」

シャキーン!!

次の瞬間、戦士の首が落ちる。瞬時に剣をひるがえし、首を斬り落としたのだ。

「く、くそお!!」

戦士の後ろに控えていた2人の剣士が、同時にブレイシアに襲いかかる。

(2人がけ、か・・・)

ブレイシアは剣を横に構えたまま、2人の間を駆け抜ける。

「何・・・ぐあ!?!」

片方の剣士の、剣を握っていた手が、胴体から切り離される。切り口からは大量の出血、死ぬのも時間の問題だろう。

「残りは・・・あんただけだ・・・」

剣の切っ先を、残った一人に向ける。

「く・・・っ・・・どっからでも、かかって来い!」

共和国軍の剣士も、剣を構えた。

「・・・そうさせてもらう・・・」

そして、ブレイシアは走り出す。脚の速さは、すごい速度だ。

「速い・・・！」

敵の剣士の脇を、風のように駆け抜ける。その時、剣士は斬ろうとしたが、全く当たらなかった。

駆け抜けたブレイシアを振り返ろうとした時・・・鋭い痛みが体を貫いた。

「がっ・・・!!」

見ると、胸の中心から剣が突き出ている。背後から、心臓を貫かれたのだ。

「・・・」

貫いた剣を引き抜くと、剣士はそのまま倒れた・・・。

2章 〱開戦の影で〱 前編(後書き)

続く!

2章 く開戦の影でく 後編(前書き)

電波塔建設のための資材を運ぶ装甲車の護衛任務に就く、ヴェルシナ王国の特殊作業員たち。

共和国領のデンバル州の北部を進行中の折、共和国軍の偵察部隊に遭遇してしまった。

ブレイシアたち特殊作業員は、植林地帯で一戦を交えることになった。

2章 く開戦の影でく 後編

くアードレイン共和国領 デンバル州北部く

植林地帯での戦いは、たった4人だったが、無事に偵察部隊を退けることができた。

装甲車は再び、進行を開始する。

「何とか、波をしのいだみたいだね」

マリオンは辺りを見渡し、そうつぶやく。

「ああ、そうだな。けど・・・まだどこかにいるかもしれないな」

ダルクは、いつになく緊張し、銃口を周囲に向ける。

「ダルクの言うとおりだ。各員、周囲の警戒を怠るな。敵は、どこから現れるかわからん」

ベクロスの指示で、作業員たちは装甲車の動きに合わせて歩きつつ、

周囲に最大限の警戒をする。

「・・・」(おかしい・・・何かおかしい・・・)

ブレイシアは拳銃を手に警戒しつつ、疑問を思う。

(先ほどの襲撃・・・いくらなんでも少なすぎる。普通はもっとたくさん、来るはずなのに・・・こんなに分かりやすい煙を出しているんだし・・・)

ブレイシアは、装甲車の煙突を見上げる。黒々とした石炭の煙が、植林地帯の上空へ舞い上がっていた。

(『どうぞ見つけてください』とでも言いたげなくらいだ・・・増援部隊も現れない・・・なぜだ・・・?)

その頃、植林地帯の奥地では・・・

開けた場所にある共和国軍の偵察部隊の陣営に、一台の白いリムジンが走ってきた。リムジンは陣営の前の門に停まる。

即座に白ずくめの格好をした男が現れ、リムジンの左側（つまり陣営側）に赤いじゅうたんを敷く。陣営の中でも兵士たちのざわめきが聞こえていたが、じゅうたんが敷かれるとすぐにそのざわめきも収まった。

一人の白ずくめが恭しくリムジンのドアを開くと、中からはこれまで白い格好をした長身の青年が現れた。

じゅうたんの両脇を、無数の兵士たちが銃を立てて守る。そのじゅうたんの上を、青年は歩く。

じゅうたんは、陣営の中心にある最も大きなテントの前まで続いていた。

テントの前で、狙撃銃を立てた男・・・ズイーヴェルが、右手の指を伸ばして額に斜めに当てる。敬礼のようだ。

「遠方、アラルシティよりお越しいただき、ありがとうございます」

ズイーヴェルは目の前の白い格好の青年に、深々と頭を下げる。すると白い青年は、手でそれを制す。

「よい。それにこっちこそ、突然の訪問を失礼する」

「とんでもございません。立ち話もなんですし、どうぞ中へ・・・」

「うむ。では、お言葉に甘えよう」

白い青年は、よく通る声でそう答える。頭にかぶった美しい羽根があしらわれた白い帽子をとる。美しい金髪が太陽の光を反射し、キラキラと輝いた。

「時にズイーヴェルよ。お前の担当するこのエリアでは、異変はあるだろうか？」

出された緑茶を一口飲んで、青年はズイーヴェルに聞く。

「はっ・・・それなのですが、たった先ほど、王国軍のものと思われる不審な戦車を部下が発見いたしました。護衛は4人で、現在私の部隊が応戦しているところでございます」

「なるほど・・・それから、変化はあるのか？」

「それが・・・連絡が全くないのです。やぐらからは煙が見えるから、未だに戦っているようですが・・・」

ズィーヴェルは、正直増援を出すべきか困っていたところであった。だが、連絡もないうちに増援を出してもいいものか・・・。

「・・・ズィーヴェルよ。お前、迷っているな？ 増援を出すべきかどうか・・・」

「！！ なぜ、そのことが・・・」

「お前の顔を見ればすぐに分かる」

「は・・・確かにその通りでございます・・・どうすればいいの・・・」

すると、白い青年は少し考える。しばらくしてから腕組みを解き、ズィーヴェルに顔を向ける。

「増援は、必要ない。その例の装甲車は、好きなようにさせるがいだらう」

「え、なぜですか!？」

あまりに突然のことに、ズィーヴェルは驚く。

それに対して青年は簡単に自分の考えを継げる。

「おそらく・・・その装甲車は電波塔や拠点などを作る資材を積んでいるのだらう。今、彼らを襲う必要はない。それに・・・」

「それに？」

「これはあくまで推測だが・・・装甲車を守る4人は、王国きつての精鋭部隊、特殊工作員だらう。彼らは過酷な訓練を積んでいる。ここにいる戦力だけでは、正直撃破は難しい」

「そうですか・・・分かりました」

2章 く開戦の影でく 後編(後書き)

陣営に現れたこの青年は、一体何者なのだろうか？

白き英雄（前書き）

ブレイシアたちが警戒していた共和国軍の増援は、現れなかった。

彼らは再び装甲車を進めることにする。

一方、植林地帯の奥に位置する共和国の陣営には、ある人物が視察に訪れていた。

白き英雄

↓デンバル州北部 共和国軍偵察部隊陣営↓

「……ところで、ゼッツ市の戦況はどのようになっているか、お前は知っているか？」

白い格好の青年は、ズイーヴェルに問う。

「ゼッツ市と言いますと……王国軍が攻め込んできた国境の都市ですね？ 確か先日、ヴェルシナ王国の工作員どもが変電所を爆破したという……」

「ああ、その通りだ。俺はこれよりゼッツ市へ視察に向かうのだが、この陣営には何か連絡は来ているか？」

青年の問いに、ズイーヴェルは少し考える。

「……いいえ、残念ながら存じておりません」

「そうか……」

首を横に振るズィーヴェルを見て、青年はそうつぶやき、緑茶を一口飲む。

そんな青年に対し、今度はズィーヴェルが質問する。

「あいつ！ 一つ質問よろしいでしょうか？」

「何だ？ 俺に答えられる範囲なら、答えよう」

湯飲みをテーブルに置き、聞く姿勢をとる。

「単刀直入にお聞きいたします。先日のゼッツ変電所爆破事件……なぜ、あの変電所が爆破されたのでしょうか？」

青年は、眉をひそめる。

「それは簡単な理由だろうか？ 変電所を爆破することにより、ゼッツ市攻略が楽になる。さらに、我が共和国議會を煽りたて、開戦の理由を作らせることができる……そう、ヴェルシナ王国の首脳は判断し、特殊工作員を動かしたのだろうか？」

だが、ズィーヴェルはまだ消化不良のようだ。

「・・・本当に、それだけの理由なのでしょうか？」

「・・・ああ、それだけだ」

「・・・」

まだ何か聞きそうなズィーヴェルに対し、青年は『もう話は終わりで』とでも言いたげな目を向ける。仕方なく、ズィーヴェルはあきらめた。

白い青年は、腕時計を見る。思わず「もうこんな時間か」と声を上げた。

「長居が過ぎたようだ。ではズィーヴェルよ、お前の部隊は引き続き、この周辺の監視を続けよ。俺はこれより南のゼッツ市へ向かい、前線で戦う兵士たちを激励してくる。では、またな」

羽根をあしらった白く美しい帽子をかぶり、手を振る。ズィーヴェルを始めとする兵士たちは、全員敬礼をした。

そして、再び敷かれたじゅうたんの上を歩き、リムジンに乗り込む。

走り出したリムジンの後部座席で、青年は窓の外に広がる植林地帯を眺めた。

すると前の座席に座っていた白ずくめの一人が、青年を呼ぶ。

「アスペシオ様、これよりゼッツ市へ向かいますが・・・よろしいですか？」

「無論だ。この度の戦争は明らかに、ヴェルシナ王国に非がある。我が国を、やつらの好き勝手にはさせない」

アスペシオと呼ばれた白い青年は、毅然と答えた。

「し、しかし！ もしあなた様を失うようなことがございましたら、我が国はおしまいでございます！ どうか・・・どうかお考えを改めてくださいますよう・・・！！」

白ずくめは、必死に懇願した。だがアスペシオは、全く聞かない。

「俺は・・・仮にも英雄と呼ばれる者だ。子供のころにまともな教育を受けていなかった俺でさえ、そのくらいのは分かっている。英雄なのだから、戦地で活躍することは当たり前なのだ」

「で、ですが・・・」

「後のことは後で、何とでもなる。俺は目の前の問題を片付けるべきだと思っが？」

どうやら彼は、戦地の視察や兵士の激励にとどまらず、自ら戦場に立って戦いに参加するつもりらしい。

「自分のことは、自分が一番分かっている。俺は、負ける戦いはしない・・・絶対にだ！」

そう・・・彼こそが、このバーレニア大陸全土に名が知れ渡っている、アードレイン共和国の英雄、アスペシオである。

たった一人で敵部隊を壊滅させるほどの卓越した戦術に、様々な武器を難なく使いこなす腕、さらには優れた指揮能力を持つ。

人々は彼を、『ホワイトヒーロー』と称する。

アドレイン共和国が近年周辺の小国を取り込み、大きく成長したのも、彼の活躍があったからである。

アスペシオを乗せたリムジンは、「ゼッツ市街地まで6時間」との看板の下を走っていた。

白き英雄（後書き）

共和国の英雄アスペシオが参戦！

果たして戦況はどうなるのだろうか？

3章 くゼッツ市の攻防く 前編（前書き）

無事に電波塔建設の資材を運ぶ装甲車の護衛を終えた作業員たち。

彼らの元には、続いてゼッツ市で行われている攻防線の補助を頼まれた。

一方、この護衛ルートの付近の陣営には、共和国軍の幹部であるアスペシオもやってきていた。

『ホワイトヒーロー』の異名を大陸全土に轟かせる、共和国の英雄。彼もまた、戦線に参加するのだ。

戦争最前線のゼッツ市街。そこで彼らは、何を見るのだろうか……。

3章 くゼッツ市の攻防く 前編

く共和国領：デンバル州ゼッツ市く

以前、変電所を爆破したブレイシアたちが見たゼッツ市は、まさに戦時中の様相だった。

街の中からは、怒号と銃声、爆音が響く。

この中に紛れ込み、兵士たちと協力して共和国軍と戦うのだ。

「報告によると、ここでの戦いの結果はおおかた勝負がついているらしい。つまり、我ら王国軍が圧倒的に勝っているということだ」

街の入り口外の城壁の裏で、ベクロスがブレイシアたちに告げる。

「全員、戦闘態勢を整える。これより正面より突撃し、この市街地での戦いを一気に終わらせる！」

「敵の増援だ！ 門を守れー！！」

共和国兵たちが、ブレイシア達に気付き、門の方へやってくる。本来なら正面からは突入することはないのだが、今回は破壊工作や諜報活動ではないため、ブレイシアたちも正面で共和国兵と対峙した。

「ヴェルシナの連中に、この国を好きなようにさせてたまるか！
食らえ！！」

敵ソルジャーたちが数人で、門を塞ぐような形になり、一斉に長銃で射撃をしてくる。ブレイシアたちは近くの木の影響や看板の後ろに隠れ、銃弾を避ける。

「やっぱり、おれたちはあんまり歓迎されないみたいだな・・・」

ダルクは、そうつぶやきつつも敵の方をちらちらと様子を見る。

「当たり前だよ。歓迎される訳ないよ」

マリオンも、分かりきっていることをあえて答えた。その手には、すでに弾を込めた狙撃銃が握られている。

ブレイシアも、拳銃を顔の横に縦向きに両手で持ちつつ、チャンスをつかがう。

（敵はリロードのため、絶対に隙を見せる・・・そこを突いて、突破口を開く・・・）

ベクロスは、あえて命令を下さない。各自、自由に戦わせるつもりだ。中でも、ブレイシアに関してはかなり期待しているようだ。

（まだ工作員になりたてではあるが、彼の戦闘での実力は目を見張

るものがる。期待は出来そう。ただ・・・協調性がないのが、問題ではあるが・・・)

ブレイシアの読み通り、一瞬銃撃が止まった瞬間が訪れた。ブレイシアは他の誰よりも即座に飛び出し、鉄の拳銃を構える。

「・・・」(今だ・・・)

拳銃が火を噴き、敵がひるむ。それからほんの僅かに遅れ、ダルクとマリオンが敵を撃ち倒していく。

最後に残った敵をブレイシアが剣で斬り伏せ、彼らは無事にゼッツ市街への侵入に成功した。

「3人とも、よくやった。ここからは、別行動をとる。まず私が単独で行動し、ヴェルシナ王国軍の司令官に接触をする。その間、諸君は王国兵と協力し、市街の制圧を進めてくれ。頼んだぞ！」

ベクロスはそう言うと、別れた。

「おれはヴェルシナのソルジャー、ダルクだ！ 共和国兵め、どんなにかかってこい！！」

ダルクは赤い髪を振り乱しつつ、周囲の共和国兵に向かって叫ぶ。当然、共和国兵はその挑発に乗ってやってきた。

長銃で応戦するダルク。だが彼自身も、かなりの傷を負うのは当然だ。

マリオンはその後ろから、狙撃銃で倒せるものを倒していく。少しでも、ダルクの負担を軽くした方がよい。

「ダルク・・・あんまり挑発すると危ないよ？ 無理しない方が・・・」

「おいおい、なに弱気になってんだよ。おれはそう簡単にやられないうって！」

「うーん・・・」

ブレイシアは、例によって一人で行動をしていた。

(あの通りは2人に任せておけば問題はなさそうだ・・・)

ブレイシアは、得意の接近戦が活かせる狭い路地裏に陣取っていた。

「お、こんなところにいやがったか。とつとこの街から出ていけや！」

共和国兵の一人がブレイシアに気付き、こちらにやってくる。相手は拳銃を持った、偵察兵だ。

「・・・断る。俺は任務でここにいる・・・放棄は出来ない」

そう言つて、ブレイシアは拳銃を抜いて発砲する。だが、それだけでは偵察兵は倒れない。

「くっ……てめえ!!」

共和国の偵察兵も、鉄の拳銃でこちらを撃つてきた。だが、ブレイシアは間一髪でよける。偵察兵は、ブレイシアに怒鳴りかかってきた。

「てめえらの国のせいで……てめえらのせいで、この街はこんな有様になつちまつたんだぞ……前まで平和で、変電所のおかげで豊かな生活ができて……」

共和国兵は、途中から涙声になっていた。

「オレの家族を返せ……家を……生活を返せ……てめえらがメチャクチャに壊しちまつた、オレの人生を返せ!!」

「……」

偵察兵は、涙ながらにブレイシアに怒りをぶつける。

「つい……さつきだ……てめえのお仲間さんがよ、オレの家に火を放ちやがつたんだ! この街は、オレの故郷だ……軍に入隊してからは全く家には帰れなかつたが、休暇を利用してようやくと家に帰ってきていたんだ。だが、突如変電所の爆弾テロが起こつたと思いきや、てめえの国がせめてきやがつてよ……! 家族を逃がそうと家に行った時には……もう……」

「……」

ブレイシアは、それを最後まで聞いた。そして・・・

「・・・言いたいことは、それだけか・・・？」

そう、偵察兵に聞く。偵察兵は、不思議そうな顔をした。

「それだけ言ったら・・・いいのか？ それを言ったところで、俺が判断を変え、お前の生活を元通りに直すとしても・・・思っているのか？」

「な・・・なに・・・」

「先ほども言ったが・・・俺は、上からの命令の元、任務についている。たとえお前にどんな事情があろうと・・・その決定が変わることはない・・・」

そう言って、ブレイシアは銃口を相手の額に向け、指を引き金に当たった。

「ま・・・ちよっと待ってく・・・!!」

ダーーーーン!!!

そう、ブレイシアは・・・無慈悲にも相手の頭を撃ち抜いたのだ。

まだ硝煙が昇る拳銃を腰にしまい、返り血を簡単にぬぐう。

(どんな事情があろうと・・・俺たちは敵だ。敵は、倒すべきだ)

3章 くゼッツ市の攻防く 前編（後書き）

ブレイシアの印象、かなり悪くなってしまったかもしれないが・
・。

でも、この先まだ彼の身にいろいろなことがあるので、彼のこと嫌いにならないで揚げてくださいねくく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9087t/>

ファイアーエムブレム ～星と魂の慟哭～

2011年10月8日05時19分発行